「京都市新景観政策の更なる進化検討委員会」第5回委員会

開催日時	平成31年3月6日（水）午後5時30分～午後8時30分
開催場所	ひと・まち交流館 京都 地下1階 京都市景観・まちづくりセンターワークショップルーム1
出席者 （委員は、 五十音順）	委員長 門内 輝行（京都大学名誉教授，大阪芸術大学教授） 委員 大島 祥子（一級建築士事務所スーク創生事務所代表） 〃 川崎 雅史（京都大学大学院教授） 〃 佐々木 雅幸（同志社大学特別客員教授） 〃 谷川 陸（市民公募委員） 〃 辻本 尚子（公益社団法人京都府不動産鑑定士協会副会長） 〃 長坂 大（京都工芸繊維大学教授） 〃 中嶋 節子（京都大学大学院教授） 〃 宗田 好史（京都府立大学大学院教授）
欠席者	委員 和泉 汐里（市民公募委員）
議題(案件)	1 京都市景観シンポジウム「新景観政策の更なる進化」の結果報告 2 「新景観政策の更なる進化」に関する市民意見募集の結果報告 3 地域のまちづくりに取り組むコミュニティ等との協働のあり方について 4 寄せられた市民意見への対応について
資料	資料1 京都市新景観政策の更なる進化検討委員会 委員名簿 資料2 京都市景観シンポジウム「新景観政策の更なる進化」結果概要 資料3 「新景観政策の更なる進化」に関する市民意見募集の結果概要 資料4 「地域の活力の維持・向上を図るための地域まちづくり制度検討会議」について 参考資料1 「新景観政策の更なる進化」に関する市民意見の募集冊子 参考資料2 京都市における各種規制と「持続可能な都市構築プラン（仮称）」（素案）における地域について

議 事 の 経 過	
発言者	発言の内容
事務局	<p>開会</p> <p>ただ今から「京都市新景観政策の更なる進化検討委員会」第5回委員会を始めさせていただきます。</p> <p>本日は、大変お忙しい中、本委員会に御出席賜り、誠にありがとうございます。進行を務めさせていただきます都市計画局景観政策課の門川です。</p> <p>なお、本日の委員会は、京都市市民参加推進条例に基づき、公開とさせていただいております。すでに、一般傍聴者及び報道関係者が来られておりますので、よろしくお願ひします。</p> <p>なお、報道関係の方々にお願ひでございます。写真撮影又はビデオ撮影につきましては、ただいまから2分以内とさせていただきます。</p> <p>それでは、御審議に入っていただきます前に、本会の成立について御報告させていただきます。</p> <p>川崎委員が、遅参との連絡を賜っております。和泉委員につきましては、御都合により、御欠席です。</p> <p>本日の委員会は、10名の委員のうち、8名の皆様に御出席いただいております。</p> <p>したがいまして、規則に規定する委員の過半数の出席がございますので、本日の審査会が成立していることを御報告させていただきます。</p> <p>それでは本日の委員会の議事に移らせていただきます。ここからの議事の進行につきましては、門内委員長にお願ひしたいと思います。よろしくお願ひいたします。</p>
門内委員長	<p>それでは、議事1「京都市景観シンポジウム「新景観政策の更なる進化」の結果報告」について、事務局から説明をお願いします。</p>
事務局	<p>(資料2「京都市景観シンポジウム「新景観政策の更なる進化」結果概要」、資料3「「新景観政策の更なる進化」に関する市民意見募集の結果概要」及び資料4「「地域の活力の維持・向上を図るための地域まちづくり制度検討会議」について」について説明)</p>
門内委員長	<p>まとめて、たくさんご説明していただきましたが、議論をしていただきたいことが2つあるということです。1つは資料3の4ページ以降を見ていただいて、主に説明いただいたのは左側の主な意見です。それに対して、「検討委員会の考え方」というのが、事務局の方で作成していただいた「案」というかたちで出ております。この考え方について、これを基に方針が出てまいりますので、委員の</p>

<p>長坂委員</p>	<p>皆様の御意見をいただきたいということと、それからもう一つは、本委員会の答申の内容、それについて議論いただきたいということです。大きな理念的なことを中心にパブコメに書いてますけど、具体的に例えばということで、委員会の途中で施策の例が出てきたりしております。その辺りをどういふかたちで答申にまとめていったらいいのかということについて、御意見をいただきたいということです。まずは、市民の皆さまからいただいたパブコメの御意見、その内容についての御質問とか、あるいは考え方についての御意見はございますでしょうか。</p> <p>高さに関する意見がたくさんありまして、簡単にいうと、「高さの規制の緩和をするのはやめたほうがいい」というような御意見がいろんなところで出てきます。これは、新聞記者の方がいらっしゃったら、是非、注意してほしいんですが、以前、ここで議論をした時に、例えば、御池通のマンションの1階の例を、階高が厳しいがためにバリアフリーじゃないっていう、階段付きの半地下ができたとか、そういう問題に対するいろんな事例がありました。その時に、高さを単に緩和するのではなくて、軒のところはそのままだけれども、例えば、街路に対して、より有益な、一般市民が楽しい何かを提供したときに、インセンティブをどう与えるか。奥の方を上げるとか、そういうことも考えたほうがという議論があったと思います。それが新聞報道される時には、高さの緩和をする可能性があるみたいな報道をしてしまったものだから、それに対する心配とか、反発とか、あるいは、誤解とかいうのは非常にたくさんの意見が単に出てきた。だから、あんまり本質的な意見じゃないことになってしまってるというのが、これから議論する上では、その新聞報道とそれに対する反応があったというふうに見るべきなんじゃないかと、私個人としては考えております。</p>
<p>宗田委員</p>	<p>おっしゃってることも、非常に、私よくわかるんですが、この全体について御意見いただいているなかで、「慎重な対応が必要」、「規制を緩和するべきではない」、「規制を強化する」というのは、91分の58、概ね3分の2くらいが、慎重な対応を求める以上の意見である。ここをどう受け止めるかということだと思います。検討委員会の考え方（案）が、ここに書いてありますが、どうもそれが、その慎重な意見に対する答えになっているようには私には思えない。せっかく、これだけ丁寧に意見を集約なさった資料ですが、今の景観政策に関して、深慮しているっていうことを真摯に受け止める回答が必要かなと思います。</p> <p>新聞報道によっては、更なる進化ということに対する理解が得られるか、得られないかがかかってくる。それを更なる進化が何なのかということをもっとわかりやすく説明し、持続可能性に向けてもきちっとした理解を得られるようにすべきである。一番肝心なことは、具体的に示していくのがパブコメ対応であるわけであって、それに対するお答え方に関しては、やはり慎重でない。そもそも、新景観政策について誤って理解されることになるので、そこはぜひ、ご検討いた</p>

川崎委員	<p>だきたい。</p> <p>長坂委員から、「規制を緩和すべきじゃないっていうわけじゃない」といった話をいただきましたが、どんなことがあっても規制を触ってはいけないという方もおられるが、山が近くにあって空が感じられるというコントラストに持っていきだという意見など、具体的も守るべきものという像が、言っておられる方々のイメージがそれぞれの地域によって違ったり、場所によって違ったりする。ほんとに京都をよくしていきたいということは、これはもうこの問題に限らずに新景観政策において、相対的な要素がある。概ね、皆さん、思っておられる具体的なイメージが違うことによって、意見の強弱が違うんですけども、リスクに対してどう考えるか。強弱の違いが出てて、様々な御意見が出来ているわけですけども、やはり高さ問題の誤解のないように最低限押さえておかないといけないことがあって、10年前の景観政策に45mからダウンゾーニングしたんですけども、基本的に面的には風致とか美観のエリアはきちんと厳格に守って、今回もその部分は議論はしていないということは、まずご議論いただいて、五条道路のところというのは、若干面的なところがあって、その9年前には、土地利用は動かず、都市計画的には触れないところもあって、当然、その周辺の重ならない範囲でどうするのかというところを考えましょうということと、もう一つは31m、25mは幹線道路沿いです。五条通も、ものすごい大きな幹線道路沿いをどうしようかっていうことを考える。その裏に街並が張り付いていて影響が大きい箇所があるが、当然そこは触らない。だから、リスクも当然全部消していったらいいんですけども、ただし31mとか25m、高さというよりも、幹線道路のというか、道路景観を基本とした高さ規制は、もともとヨーロッパから考え方を導入したわけです。もともと31mの高さ規制、大正時代ぐらいにできたものですが。その時に、幅員と高さが1:1。これが基準になった。まず、街路景観そのものを少し活性化していったらいいので、賑わいを取り出していく。都市計画は生ものなので、土地利用状況とあわせて考えて、活性化したほうがいいのではないだろうか。そこのところだけは、しっかり投資と、不安は少なくとも、絶対そこは今は押さえるべきところではありませんで。きちんと説明していけば、誤解は起きませんで、もっとポジティブに捉えることができるのではないかと。</p>
門内委員長	<p>高さの問題というのは、いろいろ議論がありますが、さきほど、宗田委員がおっしゃったように、この回答の欄を見ると「守るところはちゃんと守ります」というぐらいで、普通に書いてありますが、やはり、ここで慎重な対応が必要というのは、いろんなベクトルがあると思いますので、京都の景観を必死に守られている人たちの努力があり、そういう部分に対して、ちゃんと理解して、だけど、それをただただ、守ってるだけでも、「持続可能なところってのはどうなるの」ということがあるので、どういうところに基づいて、何を守って、何を発</p>

	<p>展させていくのかというところを議論ときちんとしていかないと、一律にすべきではないと。何を省いて、何を付け加えるのかといった非常に抽象的なところで議論が発生して、実際、パブコメに出したところは、具体的なところまで踏み込んでないところがあって、具体的な施策に落とした段階で、かなり慎重な議論とか対話っていうのをかなりしているのではないかと私は思っています。そうではないところという部分で、どっちだっていうんで、飛び交ってしまうかたちになるわけです。そもそも、今回の政策自体がそういった時代から知識社会の時代に変わって、産業の構造もみんな変わってきている。いろんなことが大きな変化があるなかで、例えば、産業もクリエイティブインダストリーとかいろんなものが出てきている。そういうなかで、今の京都が、例えば、空いてる土地が次々に出てくる、どんどん変わっていくそういう形のものでいいのか、どうかという、そういう持続可能な京都を目指してどうしたらいいのかという、そういう問いがあるわけですね。もちろん、そのなかには、今まで守ってきた眺望とか、歴史のまちの雰囲気とか佇まいとか、そういうのがある。それは、やはり何を守るのかという意味では、そういう言葉の文言の書き方が、さらっとしてるように読めてしまう。</p>
宗田委員	<p>これはパブコメの資料の中に、例えば、「インフラ整備の進展」とか、もう少し分かり易く書いてあると、もっと身近な問題として、土地利用の転換が必要だとか理解される。その辺もやはり、誤解があったのは確かだと思う。</p>
佐々木委員	<p>今のお話を聞いて、一つ、違う角度から話します。今、ソサイエティ5.0というカタチで、全く新しい社会になっていく。私はそれはソサイエティ・オブ・クリエイティビティというんです。つまり、創造性社会。そこでの働き方、暮らし方、そして産業が変わっていきます。ですから、工業社会とか、いわゆる、初期の情報化社会とはまた違う要素が都市でも必要になってきます。その兆しの一つは、ここ数年、例えば、公共空間を復興しましょうとか、あるいは、パナソニックのデザイン部門の進出。こういうクリエイティブ系の産業が、今、京都の南部というより、むしろ都心に出てくるというふうに、ここで考えられるのは、やはり、京都という街並み、景観が持っている日本の伝統を踏まえた要素と、それから、一方で、すごく新しい発想が行えるというか、知識資本というか文化資本というものが評価として出てきた。ただ、この流れが進んでいくと、ふさわしい建物が、それからどこまで実現できるかっていう、個の問題が出てくる。その時に、そこのところを町家型のオフィスの面的な展開もひとつあるだろうし、それから、既存のビルのリノベーション。おそらく、既存のビルのリノベーションっていうのが、一つずつ、離れていった時に、どういうふうに先手を打って、デザインの基準を決めていくかということ。それがおそらく進化するっていうことに。やはり町家もとりあえず減少を食い止めたい。特に、大型の町家が解体され</p>

<p>長坂委員</p>	<p>る、そういった現状があり、ここをしっかりと支援していくっていうのは、一方で、これは堅持していく。援助してまちづくりの更なる面的な展開を作るっていうことは、きちんと踏まえたい。あとは、基本計画も含めて、そこをどういふふうに誘導して、原則みたいなことをまず確認して行って、総体としての、京都の文化景観、まちづくりの景観っていうものを新しいものにしていくという。創造都市といえば、こういった考え方、哲学、これをまずしっかりと定義するということが必要じゃないかと思います。</p> <p>一般市民の方々に伝えようとしたときに、誤解があったとおっしゃったんですけども、戦後の焼け野原の今後を作ってる時に、導入をどうするかっていう議論と、わりと少ない言葉で、市民と専門家を同じレベルで語り合えることを議論しようという時に話し合っても難しいのは、どんなレベルの人たちが、既存の状況をどのぐらい、どのようにとらえてるか。さっき、全体の意見っていう話、ありましたけど、町家が建っているだけではなくて、すでに既存のビルが建っている。それから、一定の制度として景観規制もあれば民法もある。それに対して、ITの時代に移行するときに、どこを見直すのかという議論をしてるのであって、既存をどのぐらい認識してるかっていうことを、例をあげて、何かしながら話をしないと、いつも高さを高くする低くするっていう大きな大筋の話ばかりになってしまうことが、今の成熟状態になってる京都に持ち掛けるのは、やりにくいだろうなというふうに思います。</p>
<p>門内委員長</p>	<p>ですから今回の特色は、あまり大きなスケールで考えるよりは、エリアで考えて、ヒューマンスケールぐらいにして、それぞれの場所でその人を中心にして、どういうふうにしていくのかっていうような議論を積み重ねていかないと、今までどおりでじり貧になっていく可能性もあるし、どんなまちにしていくなか。ヨーロッパだと、フューチャーセンター作ったりして、自分のまちの未来がどうなのかという議論をしてるわけです。だから、大きな議論も必要だけど、今回の場合は、例えば、高さの部分をいろいろ、いじっていくにしても、こういう都市のビジョンを実現しようという、そちらがかなり鍵になってるので、今のところは、持続可能な都市構築プランということで、提案が出てるわけですので、各エリアのなかで、それを実質化していかないといけない。</p>
<p>長坂委員</p>	<p>あとは、エリアという考え方と並行して、もっと小さな部分というものも、いろんなことが起こり得る部分についても議論をしていかなくてはならないだろうという気がします。</p>
<p>門内委員長</p>	<p>先ほどの、増減築の問題でも、建築基準法の改正が検討されていて、住宅は20㎡以下は届け出なしで、用途変更できるようになる。それから、住宅団地で</p>

<p>谷川委員</p>	<p>も、シェアオフィスでビジネスしたり、お店を入れるというのは全部可能ということになり、住まう場所と働く場所、生業の場所が合体していく形で、ビルディングタイプも違う形になっていって、自分たちはどんな形のまちにしていくかと考えていかないといけない。</p> <p>今までの意見に被るところはあるかもしれないが、この辺の意見は、基本的に規制を厳しくするか、緩和するかというところの議論にあると思う。この委員会で言った緩和というのは、市民の自由な発想を誘導するための緩和であって、そう考えたときに、その規制の厳格化と緩和というのは、両立できると思っています。それで、厳しい審美眼と自由な発想というのは、両立できるものであって、そのバランスをとるコミュニケーションというか、審査の方法が重要になってくると思う。今は、デザイン基準として、勾配屋根や高さ制限があって、基準をクリアするための設計計画が行われるという話があると思いますが、地区ごとの方針はそれぞれ既に決まっていると思うが、それが個々の敷地において、デザイン基準にもっていく時に、地区方針がちゃんとデザイン基準にリンクしているかというのが少し疑問に思っている。色彩や空地の配置、オープンスペースの配置等について、個々の方針を敷地のデザインに結び付けるような何かガイドラインのようなものが求められているのかなと思っています。</p>
<p>門内委員長</p>	<p>一律に全体を保存か開発かではなくて、厳しくやれるところは思い切ってやっていく。そういうふうなところが混ざりあって同調してやっていくには、それはどういう基準で、どれがどういうふうな仕分けをしていくのかというのがポイントになります。</p>
<p>大島委員</p>	<p>パブコメでいただいた御意見については全部読みました。中には読めない字もありましたけど、読みました。目がしょぼしょぼになりながらも、3日ぐらいかけて読んだんですけども。ほんとにすごく、いい加減な書き方でなくて、ちゃんと考えて、わかりやすく説得する、気持ちを持って書くというものが少なからずありましたので、それに対して、やはりしっかり答えていかなあかんというふうに思いました。しっかり答えることによって、それだけ景観についてしっかり考えてる方が意見を寄せていただいているわけなので、納得していただいてパートナーになるというようなことであると思いますので、その点については、しっかり返していかなあかんと思いました。今日、配られた資料3については、ホームページで公開される本文だと思しますので、これについても、書きっぷりとか、答えっぷりというのはちょっと重点的に見させていただきましたが、資料3の6ページの上の御意見の下からから3行目、「京都市において、そのような視点からいただいた御意見を踏まえ、政策を進めていくことを期待します」と、なんかちょっと軽い答えになってしまってます。これについては、もうしっかり受</p>

<p>門内委員長</p>	<p>け止めて、「京都市について、受けとめていただいて、部局を超えて情報を共有して、進められるように推進していくことを後押しします」と。それぐらいしっかり答えていくことが大事なのかなと思いました。他の項目では、「進められるものと考えております」という表現になっているんですけども、ここだけが「期待します」という感じの軽い、ライトな答えになっているので、でも結構大事なことを書かれてると思いますので、答え方ひとつについても、大事にすべきかなと思いました。やはりその中には、具体的な手続きとか、透明性とかっていうものを書かれているものが多かったので、やはりその手続きとか、運用とかについては、考えていきますというふうなところをちゃんと答えて書いていくべきかなというふうに思いました。それについては、9ページの下段については、「仕組みや運用の在り方について、いただいた御意見を踏まえ、検討を進めてまいります」というふうに、この項目では書いてありますが、同様のものについては、7ページが一番下の段、「地域コミュニティの活動やエリアマネジメントとの連動」。いただいた御意見では、「地域で既にある団体の方については、私たちも一生懸命、景観づくりやっているわけだから、連携していきましょうよ。」というふうなアピールを書かれてますが、答えが支援策ということで、ちぐはぐな答えになっていますので、支援していくことを期待されてるわけでもなくて、ただ、やはり、自分たちがちゃんと責任を持って作っていくから、そこはある意味、任せてくれというふうなところも言われてると思いますので、それに適した答えが必要かなと思いました。9ページの上段の一番下の御意見として「既存不適格住宅については、高さ制限を緩和し、建て替え時の激変が抑止されるようにしてほしい」と書かれていますが、これは意見書の原本を見る限りでは、既存不適格建築物ではなくて、マンションに限っての御意見だったと思いますので、ここは誤解がないように書いといたほうがいいかなというふうに思いました。</p> <p>政策をどういのかたちで実現していくのかという実現手段というのは結構大事で、それを完璧な回答を行政内で作ってという、そんな回答なんかなかなかないわけだから、それをどういのかたちで、市民の意見を入れながら一緒になって考えていくのかという、その実現手段のところ相当きっちり、そういうふうに組み込んで、新しい施策の考え方って、国会が決めてるSDGsなんかでも、第17項目目を実現しますと。どういのかたちで、実現するのかという、その実現の仕方は、ガバナンスの取り方が実はすごく大事だと思っていて、そういう意味では、はっきり決められるところは決めていただいて、決められないところに目を向けて、一緒になって決めていく。そういうかたちの考え方というのはすごく大事なかなと思いました。その辺のスタンスをきちんと考えておかないと、さっと流れてしまって、その隙間で、姿勢を見られてしまうという、そういうことはあるから。</p>
--------------	--

宗田委員	私も原文読んだけど、マンションだけじゃないと思うんですよ。この表現どっちなかと思ったんだけど、既成市街地の中の住宅のことを取り上げていて、既存不適格の建替についての意見かと思ったんだけど。
門内委員長	そういう意味では、やはり、文脈から切り離して、断片の文章を出してるから、もとの文脈と誤解のないようにうまく書いていかないと、取り上げた意見自体が違う要約になってしまったら、大変なことになるので。
中嶋委員	<p>パブコメを真剣に見させていただいて、これまでの景観政策をかなり市民の方々は深く理解していただいて、主体的に参加してきてくださった結果がこういう、批判的なものも含め、多くの意見をいただいたのかなという、それはすごく重く、お叱りの言葉も含め、受け止めたいなと思っています。そのうえで、やはり、高さの問題に収斂しまっているというのは、何が問題なのかということ、この新景観政策がどの方向に進化しているかということをしちっと示せていなかったのではないかということだと思います。もちろん持続可能なということではあるんですが、持続可能な、あるいは新しい社会のあり方みたいなものを見据えたいというので、じゃあ、計画してどういう方向に向かっていくべきなのかという、そういう理念を京都市が向かうべきという言い方。みんなで作っていきたい一方、全体像があって、それで、それを作っていくには、今、やはり、個別の個々の地域のやはり景観の在り方というのも大事で、そこで活動されている、非常に大きな成果を残してくださっている地域を今回、きちんと見直していくんだと。そのなかで、ある場所については、高さを緩和するのも含めて、地域づくりはされるべきなんだというそういうふうな文脈の中で、高さということも出てくるのかなというふうに思っています。なので、進化の方向をやはりもう少しブレークダウンをしていく。さらにその地域ごとに作った景観の目標というのは実は、隣り合う地域で、相反する利害があるようなところで、たぶん、もめているものがあるって、それをどう整合していくかというときに、もう一度、全体像に戻っていくとか、そこを整合していくような方法を考えていかなければいけないのかなという。だから、大きな方向から小さいほうに、小さいところに、ちゃんとすくいあげていったものをもう一回、大きな所に返していくときに、どういう進化の方向を見据えているのかという。具体的には、それをその地域のかたちで、落としだかたちで議論を進めないと、見えてこない部分もあるのかなというふうに思います。パブコメの御意見に対する考え方も、どういう道筋で、みんなで作り上げていくんですよという、そういう未来のステップみたいなものが、見えてくるような書き方の回答というのが、やはり、私としてはふさわしいのではないかなというふうに思います。</p>
川崎委員	今回いただいた意見、非常に目に見えるから、景観政策に対して、いろんな各

	<p>種の課題点が出てきてるんですね。ただ、景観政策だけでほとんど解決できないような問題点っていう。地域活動とか、町家をどういうふうに活性化していくか。ただ、これは今、建築物の高さや色を中心としてしている政策では、とても対応できないことはいっぱいあります。それを無理に答えようとされないほうがいいんじゃないか。全部景観で受け止めようとせず、それが、トータルで京都市としてはこのように考えているという視点で答えを整理するというのほうがいいんじゃないかなと。意見の中で例えば、鴨川の源流域で府民と協調ということが出て、これは、京都府の鴨川府民会議というところで、かなり議論してるんで。景観の対策、それから、納涼床の対策としてガイドラインを作成して。それから地域の雨庭の設置とか、これも防災問題。これは重要な視点でこれから防災をどうというふうを考え、水害とか、水の問題、ゲリラ豪雨とか、どう対処していこうかといった。これ、京都市全体で受け止めないといけませんし、西洋諸国では、都市全体の勾配を調整して、川の氾濫を緩和していく。ヨーロッパやアメリカの諸国ではものすごく先進的に防災対策を全体の社会基盤の問題として扱っていく動きが出来ている。それに対してどうというふうを考えていくのか。ただ、これは、景観施策とは質が違いますので。もう一つ、都市計画の問題もそうですね。観光の問題とか都市計画、交通の問題、それから、ホテル。でもホテルの制約などは、土地利用のゾーニングを変えたりと。全体として、問題点としては受け止めるけども、本委員会の関連でもって、京都市として協調していく。連携の情報を得ることによって、オール京都体制という、オール京都市体制を京都府も合わせるかたちで、どう情報を共有化していくか、ここが大事になってくる。</p>
門内委員長	<p>景観というのは総合政策で、景観づくりというのは景観規制みたいなものだけでできるわけでないから、先ほどの防災とか産業政策とか、全てが絡み合った結果として景観が現れるわけで、そういうふうにと考えると、個別に政策を考えてるものに対して、市民側から見たら、それは景観とか風景っていうかたちで捉えられるわけです。だから、むしろ、総合的に全体として、どうやったらいいのかっていうふうな考え方を示すのは景観政策の責任かもしれない。それを政策に落とすときに景観政策としてのボキャブラリーは限られている。</p>
宗田委員	<p>持続可能な都市構築プランでは、他の政策と一緒にということを謳っていただいているので、景観政策との関係は、明確に示すべき。検討委員会の考え方のなかで、持続可能な都市の構築と、いろいろ絡んでくるんだというしっかり書くべきだと思います。まず、5頁の(1)常に「進化する政策」(2)持続可能な都市の構築、まず、この地域中核拠点エリアと日常生活エリアに産業があつてということを書くべき。それから(3)でインフラの整備によって景観政策を見直すべきだ、ということを書くべき。それから、7ページの(2)のところ、市内の守るべきところを押えた上でこうなるということを書けばいいと思う。この</p>

	<p>他、6ページの(5)が、他施策との連携を図るということかと思うが、そこで、SDGsや都市マスでどう書いてあるかということも含め、ある程度対比軸で見たときに、計画性を総合的に検討する必要があるんだという論理を、ぎゅっと凝縮して。それに対して、4ページの一番最初のところでは、もっと、これまで皆さんの努力を大切にしながら、なにも心配することはないんだってということ、この共通のエリアでは、景観政策の成果があるんですね。さっき言った、6ページの上のところなんかは、こういう課題もあるんだけど、景観政策の効果があるんでクリエイティブな会社も進出してきたとか、ラインも進出してとかっていう。それに対して、4ページの一番下、規制強化に関しては、一番下の景観政策の見直しの話あるじゃないですか。眺望景観の見直しをして、一定評価するわけです。当然、御意見いただいた醍醐寺の問題は理解した上で、こういう取組を丁寧に支持できるように、景観まちづくり協議制度を整えたわけで、こういった地域については重点的にこの制度を進めるということを景観政策の進化の一つとして書くわけです。緩和が進化じゃなくて、規制の進化だ、進化してるんだということが、わかるように書いて、それをよくしていくためについてというような、そういう論理展開を書いてないと、せっかく、反論する機会があるんだったら。だから、持続可能な都市構造プランの方にも盛り込むし、景観政策にも盛り込むっていう形で、皆さんの期待以上に守ってるんだってことを伝えるべきである。</p>
川崎委員	<p>持続可能な都市構築プランに関する市民意見募集の意見集約は、今、整理いただいているが、景観政策と関係はしてますし、当然、それが認められるというか、皆さんの御意見を整理している意見のなかに相対的に持続可能な都市として、地域のビジョンというのもある程度、決めていきましょうという考え方があ</p>
宗田委員	<p>相互依存の関係ですね。</p>
辻本委員	<p>今回、一番初めのところで、高さ規制に関しては概ね、市民の皆さまは高さを厳しくしていることに対しては、賛成だという意見ですから、緩めるべきじゃないと。そこは過去10年間の経過で成功だったなという。そのうえで、私が興味があったのは、例えば地区計画によって、用途利用をコントロールするとか、山科区は、自由度の高いまちづくりを可能とするので、もっとできるんじゃないのか、北白川とか、嵐山界隈の住宅地は、もうちょっと、抑制したらいいんじゃないのか。そういうエリアの話が少し出てますが、私は、エリアの話がもっと出てもいいと思う。高さの話が多いのは、報道が誘因したのかもしれないけど、もう少しエリアの話を出してほしい。出し方については、もらった意見は細かく書いたらいいけれども、こっちが出す、アウトプットする意見というのは、もっとシンプルでいいと思います。1つのその問題に対して、答えは全部一緒にして、</p>

	<p>3つぐらいとかいうアウトプットもありかなと思います。そのなかで、大きなビジョンをわかりやすく書かないと、さっきソサエティ5.0の話もありましたけど、あれも、今、私ども、鑑定評価の最中に内閣府の経済白書とか読むんですけども、平成30年度にソサエティ5.0の社会へとあるが、難しくて分からないと思いますので、市民の方がもっと意味がわかるように書かないと、だいたい、ソサエティ5.0の説明をインターネットで調べるところから始まりますから、それじゃあ、伝わらないと。普通の市民に伝わるように、シンプルに簡単にアウトプットは慎重にというふうに、私は思います。</p>
門内委員長	<p>一応、重複、「検討を進めてまいります」という、後ろのほうの最後の言葉で全部、羅列してると、それとは別に、トータルに全体でどういうふうに考えるのかっていうことが必要かもしれない。</p>
大島委員	<p>資料4の説明について、補足しときたいと思います。「地域の活力の維持・向上を図るための地域まちづくり制度検討会議」ですけども、これは、昨日、最終回を開催しまして、これは結構、密に具体的な議論を重ねてきておるんですけども、この検討会は町家だけのものではなくて、まちづくりの担い手というのが、多様化してきますと。従来というのは、地域コミュニティを核とした地域まちづくりについて、展開してきてるわけですけども、そうではなくて、多様化してきている。例えば、そういう投資家が京都のまちづくりを応援したいということで、お金を出すというふうな参画の方法もあるわけなので、そういう時代に見合ったようなまちづくりの支援策を考えていこうというような主旨で検討しているものです。</p>
門内委員長	<p>誘導型ビジョンというのが、わかりにくかったので、解説をお願いします。</p>
高橋まち再生・創造推進室担当部長	<p>これまでも、ビジョンというものは、作っておりましたけど、これは地区計画とか、建築協定の策定の前に、まずはビジョンを作って、それを実現するために地区計画をどういう規定にするとか、考えてきたものでした。だから、一方で、そういった規制的手段だけでは、なかなか、地域の方々の思いが実現できないということが、課題としてあると思っております、誘導型ビジョンでは、これまでのそういった規制調整型だけじゃなくて、例えば、もっと地域の思い、地域のビジョンに沿った活動をするような事業者に来てほしいとか、そういうときに、地域側から我々の地域は、こういうことを目指してるんですよという発信をして、事業者を誘導してくると。そういう意味の誘導、そういうビジョンを作成しましょうというというのがこの誘導型ビジョンの作成ということになります。</p>

門内委員長	誤解を受けそうな名称。むしろビジョンは作っていくという側面を、というのであれば、ちょっと名前があまりよくない。
大島委員	誰が誘導するのかっていう主語がもっとわかるように。
佐々木委員	共に創る。共創のほうがいい。
高橋まち再生・創造推進室担当部長	この検討会議では、そもそも住民の方々が主体となって作るっていうのをベースに考えていて、そのなかで、誘導型って出てきたんですけども。今、この景観政策の中でも、いろいろ、そのビジョンということが出てくるなかで、それとの関係において、どういう言葉にすべきかということについては、ちょっと検討の余地があるかなと思います。
門内委員長	持続可能な都市構築プランでまとめられたエリアのビジョンとこっちで積み上げたのが一致してくるというか、こっちで下からあげていくと。そこを実質化していかないと、あまり絵に描いた餅になっちゃうとよくない。
大島委員	言葉については、私もコンサルティングって言葉については、異議ありというかたちで、言っておきましたので、たぶん、見直されると思うんですけども。そういう意味じゃ、検討してきた内容というのは、景観というものについては直接、触れてこなかったんですけども。結果としてその地域の人の営みとか、事業とかそういう営みがどういった風景をつくるのかとか。中身を作るのかっていったところで、大きく重なってくるところと思うんです。そういう意味では、先ほどのパブコメの返しのところで言いますと、7ページの先ほど、地域景観づくり協議会の話とか出てましたので、これは、こっちの検討会のほうでも、十分話が出てきたわけですし、そういったような活動をされてる方をゲストに招いて、かなり突っ込んだ話を聞いたりとかしてますので、一方で、例えば、こういうふうな協議会ではこういうふうな検討がされてますとか、そういう横串につないでいくようなものについても、入れていってもいいのかなというふうには思いました。
門内委員長	エリアマネジメントは、地域再生エリアマネジメント負担金制度もできましたから、そういうことも踏まえて。
宗田委員	いただいた意見の中では、原文の127番の意見のように持続可能な都市構築プランと新景観政策の更なる進化の両方をしっかりと見た上で、両方との関係性に意見されておられるものもある。一つ一つの熟度が違うのは当然なんですけど、そういう我々の議論を分かって、お答えになってる御意見もあるので、そういった

<p>門内委員長</p>	<p>点でも十分配慮が必要。</p> <p>今日の議論の終着点というのは、資料3に「検討委員会の考え方（案）」がありますが、これの「案」というのが取れる形にするにはどうしたらいいのかということを議論してるわけです。それが出てくると、答申ができて、それを受けて、今度は制度設計に入りますから、この制度設計は丁寧にやっていく。特にこれをどこに適用して、誰がどうやって決めるのかっていう辺りは、すごく大事になりますので、この委員会としては、この3月までに、そこまで持っていくわけではございませんので、その制度設計をしていく時の基本方針と基本的な考え方、そのブレないスタンスというのをを出していく。ですから、この「案」を取っていくとかたちにしたいなと思ってるんですが、長丁場なので、10分ほど休憩を取らせていただきます。</p> <p>—休憩—</p>
<p>門内委員長</p>	<p>皆さんお揃いになりましたので、再開します。いかがでしょうか。少し具体的に見ていってもいいですね。ご自由に言っていただいてもいいけれども、いかがでしょうか。先ほど申し上げたように、4ページ目から、その後11ページ目まで、検討委員会の考え方の、その辺の書きっぷりっていうか、ちょっと気になるところとか、これにあまりこだわらないで、大きな意見いただいても結構ですし。あるいは、ここで気になるところ、いくつかご指摘をいただきましたけれども、いかがでしょうか。</p>
<p>宗田委員</p>	<p>同じことなんですけど、細かいことを言うようですけど、4ページの規制緩和をするべきじゃないとこの、お答えのなかに、「新景観政策の基本的な考えのもと、持続可能な都市の構築の要請や」の次に、文化庁の京都移転、機関的なインフラの整備など、社会情勢の変化を感じるとあるが、その持続可能な都市の構築の要請はとても重要だと思うが、文化庁の移転はここでは書かなくてもいいのではないかと思う。確かに、インバウンドが増えるとか社会情勢の変化ってあると思う。この辺は書かないと都市計画政策として、あるいは都市政策として何を望んでるのかということが、ボケてしまうと思う。だから、こういう細かなところで、きちっとシンポジウムやって、川崎委員と門内委員長が出ていただいて、それはしっかりとやってるにもかかわらず、そういうのが残ってしまうと、ぶち壊しにならないとは限らないので。</p>
<p>門内委員長</p>	<p>ここに込めてる気持ちは、文化庁が京都に来るっていうだけではなくて、これからの新しい社会のなかで、文化っていうものが産業にしる、駆動していくような力を持つ、そういう時代になる。ということは、文化庁が京都にただ移転する</p>

	<p>だけではなくて、新しい文化庁が新しい文化行政をしていくことが、今あるクリエイティブインダストリーなんかを発展させるに役立つという気持ちがあって、ただ物理的な移転を言ってるだけではないのではないかと。</p>
宗田委員	<p>これは別のところで書くべきだし、別のところで書くところがあるんです。</p>
門内委員長	<p>それはそれで、大きな分脈のなかで書いたほうがいい。</p>
川崎委員	<p>意見募集冊子の第1章「進化の背景」のところの1番から4番までの間の項目をここに入れていただいているところなんです。特に文化庁の問題点は、文化を基軸とした総合的なまちづくりという、このタイトルのなかで書かれてるんですけども、産業のみだけでも非常に味気ないまちになってしまう。京都が歴史的に設計してきた文化を醸成させながら今があるという意味でここに書かれています。</p>
門内委員長	<p>だから、第2回検討委員会のゲストスピーカーのラインなどにお話を伺った時にも、そういうデザインセンターみたいなもの、京都に作りたいたいという企業、結構あるんですよ。それでそれは、京都だったらグローバルに人材が来てもいいという人たち、結構いるんですよ。だからそういう意味では、書くべき場所はちょっと変えてもいいのかなとは思ってるんですけど。</p>
佐々木委員	<p>やはり、捉え方っていうのは、とっても大事なので、どうしても個別の答えだけを先に書きちゃってますね。やはり今のような問題になるので、その個別のところは文化庁移転って入れないで、むしろ、繰り返すにはなるんだけど、まず総論として、出てきた意見に対して、全体として、こう考えようかなと、いうところに是非文化庁移転というのを入れていくと。しかも、今度の新しい文化資本、基本計画、基本法ですね。そこには文化的価値と社会的経済的価値、この3つをバランスをとりましょうという、新しい文化政策っていうふうに書いてますので、その辺り、目配りいただけると。</p>
谷川委員	<p>パブコメに対する意見とかではないんですけど、具体的なビジョンを、どうやって示していけばいいかなと考えたんですけど。その新景観政策でも、特徴的なのは眺望景観創生条例があると思うんですけど、それは視点場と視対象を分けて、その関係性を誘導してるというか、そういうものだと思うんですけど。その視点場と視対象自体を決めれるのは、歴史的な眺めから、すごいたくさんの調査をして決められたと思うんですけど、それが結局、この内容として屋根の形状とか高さに落とし込まれていて、そのプロセスというかが見えてこないなと、ちょっと思いまして。どういったものが京都らしい眺望なのかという、この視点場と視対象の関係をもっと示していくことが、具体的な景観のビジョンを楽しくいく</p>

	<p>ことに示していくことになるんじゃないかなと思いました。</p>
門内委員長	<p>眺望景観創生条例は設立してた時に、私がまとめ役だったので、実際には昔、京都はほとんどそういう借景だらけで、至るところ借景があって、我々が調べた時もリストアップしたのは597カ所、全部調べて。その中の38カ所を選んで、最初の条例に入れて、今回また改正をして、11カ所増やしたんです、寺社の景観を守るということで。だから市民提案制度も入ってるので。それをただ基本的にやはり、私の家から大文字見えるようにするために、途中の人、我慢しろという言い方はできないので、視点場の公共性っていうのが、すごく重要なポイントになると、いうふうに認識しているんですけど。</p>
谷川委員	<p>僕もそのインターンにいた時に、その眺望景観の事前資料というか、調査資料みたいなのを、ちょっとだけ見せていただいて、すごいたくさんの昔の歌とかから調査して決められてると思うんですけど。その関係性みたいなものが。</p>
門内委員長	<p>デザイン基準とは直接は結びついていない。それは眺望景観創生条例の方からデザイン基準が出てきたわけではないです。それはむしろ、長い間、京都が景観行政をやってきて、いろんな蓄積のなかでやってきたルールとか、手法みたいなものを実体化してきてるというふうに思います。</p> <p>関係はないとは言いませんけど、直接的には結び付いていない。例えば山のその斜めのラインと、それから建物の斜めのラインとが眺望してとか、そういう意味では関係はしてるんですよ。だけど、直接的にこの眺望景観から、これが出てくるっていうかたちではなってないと思います。</p>
谷川委員	<p>その関係性は、あまり重要ではないですかね。</p>
門内委員長	<p>重要なんですけど、そこまでやると。だから進化するっていうって、手直しをしていかなければならないんです。いろいろ完璧なものできてるわけではないので。主に、どちらかというと町家をベースに作られた基準なんです。だから中高層建築物になると、うまく適用できない屋根の問題とかもあって、課題は残ってるんです。</p>
長坂委員	<p>7ページの(3)の都市機能や広い意味での公共貢献を含めた部分の意見について、「オープンスペースを設ける」など前向きにいい意見をいただいているなと思います。これに対する考え方案の上から3行目から「高さやデザインの規制の活用を検討しております」とありますが、「規制の活用」っていうのが、少し気になるなと思いました。規制ではないことも含めて検討することを考えているのではないかと思います。それからもう1つ、9ページの「デザインの創造性を</p>

	<p>発揮できる仕組づくり」への御意見というところに対する答え。これもデザインをこれから創造的な方向にしていこうというので、前向きな意見をいただいているんですけども、その右側の2行目、「地域ごとの景観特性に配慮した」は、意味は悪くないけども、「地域」ではなく「場所」という言葉のほうがいいと思います。地域っていうと、何か今まで語られている地域というのが、いっぱい出てきてしまって、個別の場所、例えば街区の角っていうことも含める場合もあるし、山科っていう場所のこともあるし、いろんなスケールの問題があるので。地域という言葉は、場所という言葉にさせていただいたほうがいい。</p>
門内委員長	<p>地域景観づくり協議会という制度もあるので、結構、ややこしい。言葉の整合性みたいな気持ちはわかりましたので、全体として言葉の使い方を、デフィニションを明解にしないと、誤解を招くっていうことで。地域景観づくり協議会っていうときの地域は、場所的な意味で使っているの。ちょっとその辺が混同しないように整理したほうがいいかなと思います。</p>
長坂委員	<p>参考までに言います。パリなんかだと同じ地域のなかで100mの街区に対するデザインの判断と、角地に建ってる建物に対する判断と、間口が10mの建物なのか、20mの建物かで判断違ってくるんです。こういう意味での場所っていう言葉だったら、そこも含めるんですけど、地域っていうと、この辺り全部についての議論になってしまうので、先ほどの、今あるものをどうやって新しいところに直していくのっていう話のときには、これせっかく前向きな御意見が返ってるので、そういうこともわかっていって、ちゃんとやりますって言いたいということです。</p>
門内委員長	<p>検討しましょう。</p>
宗田委員	<p>フランス語だと的確に分けてますけどね。</p>
門内委員長	<p>景観論をやるときには、スケール論を入れないと、ものすごく大事で。どのぐらいのスケールでものを考えていくのかっていうのが、非常に大きなポイントになるんですよ。だからポートランドなんかは、60メートルっていうのを基本ユニットに、まちづくりを考えてるわけですよ。</p>
大島委員	<p>検討委員会の考え方の書き方については、パターンが大きく2つあって、検討会で検討すべき内容については、「検討を進めます」って書いてあって、それ以外の内容とか、別のセクションの内容については、「市について進められると考えます」っていうふうなことなんですけども、京都市が進めてくれるんだろうではなくて、寄せられた意見なので、「関係部局としっかり御意見を共有して」</p>

	<p>っていうふうな一文を、その姿勢を入れたほうがいいのかなというふうに思いました。結構そっけない、「いただいた御意見を踏まえ、検討を進めてまいります」っていうふうに書いてある項目については、多分、思いを持ってここに出された方については、しっかりこれも見て、自分のコメントここにあって、どういふふうな答えかっていうこと、照合されると思いますので、それに対しては、そのありきたりのパターンの言葉を入れるだけではなくて、その文頭に、どういった点について、しっかりと検討を進めていきます、というような、ちゃんと答え、応対できるようなかたちで答えていくほうがいいのかなというふうにも思いました。とても手間がかかるものですがけれども、やはりこれだけ寄せられた意見ってというのは、それ相応に重いと思いますので、それぐらいの手間はかけるべきかなというふうにも思いました。</p>
門内委員長	<p>それと、委員会の途中の段階で、いろいろな資料が出ていて、そしてそのなかで例えばっていうなかたちで、いろいろな事例が出ていて、それがいろいろな意見を誘導してるようなところがあるし、実際、制度を具体化、ここで考え方を具体化していくときには、実際の場所がどこになって、どんな制度が導入されてっていう、ほんとのその制度設計論をちゃんとやらないといけないので。そういう意味では、今回考え方をはっきりさせると同時に、その制度設計の仕方をちゃんとコントロールするっていうか、規定するような書き方をちゃんとしておかないと、そこの姿勢ですよ、方法論ですよ。そこがすごく大事なところ。そういう意味では、最終的にどんな政策にブレイクダウンしていくのかってことイメージ、やはりその文章に出てくるわけですよ。そういう意味では、文言を丁寧にちゃんと書くという以上に、どういう制度設計をしていくのかっていう、その構えみたいなものが文章に出てくると同時に、そういう文章をちゃんと書けば、その制度設計の仕方に対して、ガイドラインもあって機能していくわけですよ。だからそういう意味で、文章は極めて重要であると思います。</p>
大島委員	<p>特例許可のところについては、丁寧に。</p>
長坂委員	<p>関係部局じゃなくて、これは道路課のほうに伝えますとか、道路課がどこまで書くかっていうのはわかりませんが。つまりこれって大まかに書いてあると、意見を一生懸命書いた市民にしては、うまく流されたなっていう印象にはなるんです。そういう意味で本当にやろうと思ってるのであれば、それは行政側としての立場もあるから、あんまり書くわけにはいかないかもしれないけど。具体的な担当部署の名前の大きな枠の名前ぐらいは書いたほうが、ほんとにさっきおっしゃった、景観という観点で、いろんなことやろうとしてるんだなっていう気持ちは伝わると思います。</p>

門内委員長	<p>ちゃんと部署を書いていると、関係してる部署を1カ所落としてたら問題だからね。そういうことがあるので、つい、「など」とか。考えたあげくに、関係になってるかもしれませんけど。でも、それは考えてみる必要はあるんでしょうね。他にいかがでしょうか。特に今回、やはり非常に大事なものは、持続可能性っていうのは、すごく大事な概念で、おそらく世界的に見ても、みんなが合意できる価値観っていうのは、持続可能性なんですよ、基本的に。</p>
宗田委員	<p>この間、京都府のやってる「地球の殿堂」を山折哲雄先生が受賞され、その基調講演を聞いてたら、もう持続可能という言葉はやめたほうがいいのではないかとということをおっしゃって、結構みんなショックを受けてたんですけど。持続しなきゃいけないっていう、そのトラウマに囚われ過ぎてるのではないかと。宗教学者でおられるので、そういった意味では消滅というか、消えるということも、考える時期に来てるのではないかとということをおっしゃって、いろいろ考えさせられたんですけど。無理やり持続するということの無理っていうことを考えたほうがいい。実際まったく違う話なんですけど、世界人口、ワールドバンクのほうも、いわゆる世界の人口が拡大するっていう状況でもないだろうと。あと、50年以内には世界人口も減少に転じるなかで、少し経済の衰退より早く始まるわけだから、世界人口をベースとして国際経済協力っていう方向と今後一緒になってくる一方だと。そのなかで、その世界の在り方、持続可能性っていうことに関する見直しっていうこともいってるので、山折先生のごことは全然違う方向からきた話ではあると思うんですけど。でもなかなか、さすがにあそこで持続可能性はもうやめたほうがいいっていうのは、山折さんだと思って感動したんですけど。</p>
門内委員長	<p>意味の取り方というのはあるけど、例えば、京都の持続性を考えたときに、京都潰れてもいいよねって、なかなか思わない。そういう結構重要な価値ではないかとは思いますが。いずれにしても、そういう理論のもとに、各エリアでビジョンをきちんと立てて、各エリアに分けてるっていうのは、ヒューマンスケールに落としてるんだと思うんです。ヒューマンスケールに落とすから、総合的に問題を考えられることになるわけですね。それをベースにしながら、景観政策をきめ細かく使っていこうっていう、そういうことで、今までの景観だけじゃなくて、そちらのコンテクストをきちんと、コンテクストフリーグラマーじゃなくて、コンテクストセンシティブグラマーにする。それを市民と一緒にやって作り上げていくっていう手続き、プロセスっていうのはすごく大事なことです。1枚の絵に描けませんので、各地域のことって。だけど実際にまちづくりをやってみると、なかなかビジョンなんて話し合っていないんですよ、みなさんって。だって目の前のマンションが建つ、ホテルが建つっていうのに右往左往していて、それじゃだめなんです。やはり自分たちのまちが将来どうなるのかっていうのを、まちづくりのなかで議論してる場所、ほとんど僕はないと思う。先進</p>

	<p>的なまちづくり地域ですら、ほとんど何もやってないっていうのが、私の印象なのかな。</p>
長坂委員	<p>今の持続可能な話のなかでは、やはり責任と利益のバランスが、ちゃんと出てこない、自分の都合でこれ嫌だっただけだったら簡単だけど、あなたそれに対してどれだけ何か義務果たしてるの、そういうふうな生物の存続と同じですけども。その辺のそのコストパフォーマンスという言い方が、あるいはこれはインセンティブっていう話も出てきますけど。その辺のバランスが、こちら側はどこを議論していくかっていうことを、はっきり可能な範囲で答えたほうがいいでしょうし、それについての実際検討しようとしてるわけですから、そういうことも無責任にならない表現っていうのが見えるような答え方がいいなと思います。</p>
門内委員長	<p>そういう意味では結構、景観っていうことで大事なものは、新しい意味での公共なんていうのは、すごく大事で、そこに貢献してるからメリットが入るとか、そういうの全部メリットだけが入って、高さだけやるっていうことはないわけですよ。</p>
川崎委員	<p>パリの事例で高さを31mから37mに引き上げたとか、誰かの水準に引き上げたとかいうのも、あそこでも都市の持続性の前に、都市の持続性と似たようなテーマで、村のプロジェクトとか、村の地区開発ですね。都市全体としてどういうふうなつぼを打っていけばいいのかっていう、開発の歴史を受けて、その時に、場合によってはその景観の規制してたものを31mのところを37mに上げてもいいとかいう議論が出て、実際にそういうこと起こっていったっていう。柔軟に、都市全体のバランスを見て考えていったところがあるわけです。それは景観だけの高さの問題だけでなく、いろんなところのルールがちょっとずつ変わっていくわけです。そういう意味では、今回いただいた意見は、実際の運営上やっていかなければいけない部分と、それから、市民意見募集冊子に記載された考え方に、例えば文言を少し足したりとか、入れるべきものがあるかどうかを、まずチェックするというのが大事かなと。例えば、市民意見募集冊子の9ページの真ん中のところで、「京都の景観の守るべき骨格の堅持と充実」と。これかなり詳しく書いていただいているんですけども、資料3の4ページ目とか5ページのところで、不安を持っておられる方が極めてあるわけですね。場合によっては、例えば、風致とか、美観とか、歴史地域だとか、そういうことまでこれが崩れる可能性がある。そういう言葉を欲するんならば、京都の景観の考えるべきうえで、守るべき風致、美観、歴史的地区などとかいうの骨格ともいえるべき原理は、社会情勢は変わっても変えるべきものではないというふうに、明確にちょっと言葉を少し具体化して入れてあげるとかいうようなことを、ここへ反映させる。それからもう1つの先ほどの意見であるとか、説明をもう少し、この中に詳しく。そ</p>

<p>門内委員長</p>	<p>これは、大きな意味で、いただいた意見の一番リスクとか不安に思っておられるところを、ここへ展開して加えていきました。加筆してあげましたとか、そういう直し方もあるのかなと。いちいち個々に対して丁寧に書かないといけないんですけども、それはちょっと時間かけてゆっくりとやって、これを完璧に作らないといけないのかなという気もちょっとしてるんです。</p> <p>今、京都の新景観政策の更なる進化の動きは、わりと東京等でも知られていて、この間、雑誌記者と話していたら、非常に注目をしてるんだなという言い方をしていた。だからそういう意味では、新しい景観政策を開こうとしてる部分があるので、その分、勢い、危なさを感じる方もいらっしゃるし、その辺きっちり、そうではないんだっていうことを書く必要があると、いろいろ。</p>
<p>宗田委員</p>	<p>せっかく欧米の都市の話になったので。新景観政策を作る10年前、その前の職住共存のときも、かなりヨーロッパの歴史都市で景観をどうしてるかっていう議論をしました。かなり良い部分を真似した部分もあると思うんですが。いただいた御意見の中にもあるんだけど、副都心を作って、いわゆる歴史センターを守って、ニュータウンっていうか新しいセンター都市の開発にっていう、そういうことを考えて、らくなん進都っていいですけどね、今ね。京都にも市役所を南に移転するっていう議論が1980年代から90年代に関してはあって、まだそれ拡大期なんですよ。いろいろヨーロッパの都市って同じ保存の話も、もうかれこれ70年ぐらいやってるので、その段階段階でいろんな進化があったと思うんですが、持続可能な都市構築プランでいうと、いわゆる工業地域をどうするんだっていう議論が、工業都市から文化都市、観光都市に転換するなかで、欧米先進国の都市はどこもやったわけじゃないですか。その間に、ポートランドも再建してますし、アメリカの都市、その中からコンパクトシティも出てくるしっていう話があって、それを80年代にやってる時は、まだベイエリアの再開発、オークランドとか、バッキーパークとかっていう議論もあったわけですが、その後、ヨーロッパのもうちょっと中小規模の都市の段階になっていくと、都心への人口回帰が起こってくるので、受け皿としてどう使うとか、それから80年代にベネチアとか、一部の観光都市ではホテルがすごく増加してしまって、都心から住民を追い出すっていうテンプレケーションが起こったりしたので、その住民の受け皿に、その工業地域の再生を使うとかっていう議論が、ずいぶん熟練したなかでやられてきたので。その時に、歴史的都心部の周辺をどう美しく作っていくと。工場としてどう再生するか、あるいはそんな空き家とか、空き地をどう再生するかっていうときにこそ、その今まで蓄えてきた景観政策を進化させて、上手に郊外の再生というか、工業地域の再生と合わせて、その自然の再生まで含めて、都市全体をきれいに構築していくっていう議論があったわけですよ。今、京都はそういった意味で、その周辺の旧工業地域、西側と南側に関して、美しさを求めて、同時にいわ</p>

	<p>ゆる、まちづくり、民主的な方法で、その都心向けに高密度になってくるマンションの圧力をそこで上手く受け止めて、第2第3の京都として整備していくっていう、この流れがきつとあると思うんですけど。そのヨーロッパではこの観光の空洞化の原因、空き地、空き家の原因、産業構造の転換だとかにさらされたまちをどう再生したかっていうことで、そのことを京都でどう扱うかっていうことに関する議論は十分熟さないまま、こういう議論をしているものだから、だから副都心を作ればいいんだとか、観光の公害がこうだとかっていう、いろんな意見が出てきていますよ。それに有効に答えるところまでの知見を、我々は示せていないので。なので、今これ、読み直しする必要があるか、じゃあその時に、欧米先進国では、我々の先輩たちはどういう解決をしたのかっていうことをちゃんと踏まえたうえで答えていくべきだと思うんですけど。まだそこまで説明が足りていないなということは、我々も大いに反省すべきだなとは思っていますけど。そういう大きな流れだと思いますね。</p>
門内委員長	<p>今こうやって、読み返してみると、基本的な考え方とか生き方は、一応書き込まれてはいるけれど、それを実際の施策に落とし込むところに、ジャンプが起きていて、例示で上がっているところが高さだけとかになってる。こちらでやろうとしている気持ちが、施策のレベルのところうまく翻訳でききれていない。少なくとも例示の範囲では。そういう意味では、施策の規制法から創造法へって言っている規制法も、そういう意味では創造法の一部で、野球のルールなんかもそうだけど、ああいうルールがあるから面白い現象も出てくるわけで。ルールには両面あるわけです。そういう新しいルールの作り方とか、その辺のデザインっていうのが、かなり大事な時代が今、来ているんじゃないかなと思います。それも、一挙にはできないから、徐々に。</p>
川崎委員	<p>一挙にできないけど、京都の場合は比較的、そういう北部はあったんですけど、南部のほうがやはり、20年も30年も言われている。それで、現在は、一番やはり大きなのは、景観形成していくってことは、人が元気でないと。前から思っているのは、都市計画的にみると、全体を見ても、高齢化していくと、市に税収が入らない。京都府の鴨川運営会議でも、鴨川の美しさを保っているのは、本当にボランティアの方々の力のおかげです。行政の方もそうなんですけども、それだけではとても予算がない。実際、京都の街の言葉、いろんな地区の自治会の方々含めて。都市全体が活性化というか、元気でなければ、この都市は持たないなと思います。ある程度のビジョンが明確でなくても、先ほど工業都市の事例を、例えばドイツなんかのいろんなライン河沿いの工業都市の転換だとかが筆頭に、いろんなところが出てくるわけですけども、それはある程度、だけでも現状維持を考えてみれば、これもう確実にジリ貧していくことは、もう予測して目に見えていることです。それをどうするかっていう余白を、都市全体が健康になる</p>

	<p>ためにどういう余白にするか。山科なんかの地区計画で見えますと、やはり、あそこ、山科、御意見のなかで自由だっというふうにありましたけども、東の盆地で、やはり琵琶湖疎水沿いの美しき景観っていうものを、総合的に丁寧に見ていかないといけないという御意見もありました。それから、刑務所跡地の活用を契機にして、町全体の雰囲気がつながっていくように、全体がとにかく活性化していかないといけない。密集市街地なんていうのもありますので。そういう意味での都市の健康性を、全体で都市計画的に総体で考えるっていうのは、これが初めてのことだと思いますので。今までそういう目で景観って見てこなかったと思うんです。</p>
門内委員長	<p>確かに、最近いろいろな事例を見ていると、例えば少子化と言われるが、東京湾岸は、逆に巨大小学校ができて、横浜に至っては10年間に限定した小学校ができた。それで、10年後には潰れますと。ある所は人口増に対して巨大小学校を作ろうということが現実に進んでいるし、一方で、小学校どんどん潰れていってなくなっているっていう。場所、場所でものすごく問題が変わっててね。うっかりしていると、それこそ、そっちに行くのかこっちに行くのかっていうのは気をつけないと、実は予測しないでやっていると。今1年間に生まれている子どもの数が90万人台だっというんです。私の時代、240万だったんです。それで大学の予算を削っていっているんです。明らかに社会変わっているんですよ。だから、そういう社会がどうなっていくのかっていうことを考えないと、今までどおりにいくかどうかっていうのは、全然わからないですよ。そういうすごい大きな変革の時代を今、迎えていて、何も考えなかったところは、いつのまにか沈んでいっているという。意図を持ってちゃんとまちづくりをしていったところは、大きな発展を遂げる。気がついて見た時は遅いんですよ。そういう大きな時代の変革期にあるっていうことは、見ていると本当に、もう場所場所で全然違うんです。</p>
長坂委員	<p>そういう意味で、地域と場所は切り分けて、ちゃんと話したいなと思っています。地域っていう言葉は、そういうことも受け入れられなくなっちゃってるんです。</p>
門内委員長	<p>とにかく、気をつけないと、本当に、この場所の隣の場所で、全然違う現象が起こったりすることは、もう必ず、ここが高かったらここも連続的に高いだろうっていう、そういう連続社会ではなくなっているようなところが、かなりあると思いますよね。</p>
大島委員	<p>持続可能性って、そういうことだと思います。字面とか、今までの既成概念からいうと、現状のまま維持拡大っというふうなニュアンスで取られてしまうんで</p>

	<p>すけど、もう少し先を見据えて、それに合わせてシフトしていくというふうなところが、おそらく持続可能性が指しているところだと思いますので。そこら辺ももう少し踏まえた時代に応じて柔軟に変わっていく必要があるんだよっていうところと持続可能性は矛盾しない。むしろ、合致しているものだと思いますので。そういう書き方のほうがいいのかもしれない。</p>
門内委員長	<p>もう、事態が発生した時は遅いんですよ。未来を見通して今の手を打っておかないと。バックチェーンのようになっておかないとね。変な話だけど、日本列島コンクリート大崩壊時代が、あと10年経ったら始まりますからね。もう法定寿命迎えて、ダムも高速道路も全部大崩壊する。今、手を打たないと、延びないわけですよ。そういう類の問題が至るところに。この間、ちょっと前にパリに行った時でも、もう、地下鉄から何から、ものすごく汚れているんですね。あれ、もう、全然持続可能ではなくなって、もう荒れ果てているっていう、そういう状態ですよ。</p>
大島委員	<p>水道管もそうですよね。</p>
門内委員長	<p>今、本当に未来を考えて、今どうするのか。どんな景観作っていくのか。どんな、広い意味での景観を作っていくのかを考えないと、持続可能では全くないんです。</p>
川崎委員	<p>神戸と京都を比較すると、神戸は、駅前に高い建物建てて、六甲山が少し見にくくなっているんですね。先手を打って、今から20年とか30年前にもう少し抑えておけば、もっと魅力的な、三宮の周辺とか、形になると思ったんですが。神戸は、そこは失ったけれども、逆に通りのデザインとか、フラワー道路とかに木をいっぱい植えたり、スポンサー花壇とかやって、魅力を生むようにしている。京都は逆に、きっちり風致とか美観で抑えてきているので、山も見えますし、それに加えて、都市デザイン、公園のデザインとか、コンペ等をやられていますけど、そういうものを進めていけば、より良い賑わいが生まれる可能性がもっとあると思う。</p>
門内委員長	<p>最近、地方都市でも、延岡とかいろんなところで、人が集まるセンターみたいなを作って、それが、いろんな施設が融合したような形で、本当に人が集まってくるようなセンターを作るっていう、大きな動きが、日本全国に広がっています。だから、そういう意味では、あれやこれやを細かくいろんな施設作るんじゃなくて、本当に拠点の、拠点形成っていうのは非常に大きな。コンパクトシティなんかも拠点形成論とも結んでいかないといけないわけですよ。</p>

佐々木委員	<p>結局、地球全体では人口爆発が続いていて、それで、基本的にかなり、大きな意味での飢餓線上にいる人たちの数が減っている。先進国のなかで、労働力を閉鎖的にしてきた日本は、今は一時的に人口減少という大きいテーマなんだけど、もうすでに政府は舵を切ったんですよ。つまり、段階的に労働力を入れると。そうする時に、どういうことを予見しながらまちづくりを考えると、いうのを聞いているので。今のSDGsのなかでいくと、11番っていうのがそれに該当するんですけども、今日の。これは、インクルーシブとレジリエンスって何て。レジリエンスは京都市がやっているんだけど、インクルーシブってあんまり意識していないんですね。パリでも大都市はかつて移民の人たちを郊外に受け止めたんですよ。郊外と都心の差ができてしまっただけで、そこでかなり社会的なトラブルが出てきて、つまり住み分けになっちゃったんですね。インクルーシブっていう概念でいくと、もう少し混ざり合うというか、そういう受け止め方っていうのは、やはり必要になってきて。今の京都で起きていることっていうのは、一方で町屋に外国の人たちは結構関心があるというか、住んでいますよね。そういうかたちでの住まい方と、それから、パナソニックのデザインセンターにも、海外からの応募が多いんですよ。そういう意味で言った時に、やはり、文化多様性という話ですよ。それと、インクルーシブ、包摂型社会、これもおそらく都市デザインに影響を与えなきゃいい。神戸の話が出たので。実は、神戸はユネスコのデザイン都市を申請する。私、その時に応援したんですけど。外見的な都市デザインももちろん、暮らしのデザインと、モノ作りのデザイン、3つにしたんですよ。つまり、デザイン以外に広げたいんです。広げることを通じて、街の全体のデザインをとるところで、結果的にそれはまだ、どこまで成功しているかって簡単じゃないんですけども。デザイン都市っていう概念を広げる、景観ももちろんそうなんだけど、景観の背後にある。街作りの景観の面では専門職を採用していますが、今度新たにクリエイティブデザイナーっていうのを行政のなかに置いたんですよ。つまり、アート系の人たちも採用しているということが。ただ、神戸市も、近い明石市との関係でいくと、明石が先進的な子育て環境を作ったので、若い家族が流出してしまうという危機感を覚え。よく似ている横浜も川崎も、川崎にやはり横浜から来て。これは明らかに子育て環境のところを重視しているかっていう。こういう話が総合されてきた時に、デザインとか、あるいは、持続可能とか、もっと多面的に考えますと、何か人口を閉鎖的に捉えて、どんどん減らんだってということだけをあんまり考えちゃうと、少し射程が違ってくる。</p>
門内委員長	<p>交流人口とか関係人口とかいろんな人口の概念の、広い意味での考え方っていうのは必要です。やはり、今やっているような議論の流れのなかで、一つの典型的な施策として、持続可能な都市プランっていうのができてきているわけで、そういうことの流れを見ていかないと。やはり、京都がいくつかの危機を、明治の時もそうだし、いろんな時に思い切った手を打ってきたわけで。そういう時代</p>

<p>宗田委員</p>	<p>を今、迎えているのかなというふうに思いますよね。僕も、東京で31年、住んで京都へ来てみると、やはり、東京の持っているすごい人と人のぶつかり合うコミュニティの力っていうのがすごくあって。京都は本当に頑張らないと非常に狭いですよね。ちょっと話が大きくなり過ぎました。</p> <p>基本計画のほうで、インクルーシブを結構重要な柱にします。もう1つ、市民参加のあり方を長年やってきたので、検討しようという気運が高まっているんですけど、総合企画局のほうですけど。その時に、ちょうど今日、地域のまちづくりに取り組むコミュニティなどとの協働のあり方っていう大きな1つの柱があって。そこをどう書くかっていう議論があるわけですよ。従来の地域、自治連合会に頼って、物事を進めてくるっていうことで、いろんなところで無理があっただけっていうか。そもそも職住共存区のガイドプラン作った時は、いわゆる職住共存地区の学区ごとに委員会を作ってもらって、景観・まちづくりセンターに大変お世話になって、地域協働型地区計画に取り組んだ。90年代に地域協働型で高さ規制をやっていうことで明倫学区とか取り組んだ経緯があるわけですよね。あの時の熱心さっていうか、しかしその限界もあったので。それが今、地域社会の変貌でっていうことなかで、いわゆる地域活動へ参加をするっていうことが条例も作って促してはいるものの、一定限界。それから、市民参加に関しても、お世話になった市民参加推進条例も、基本計画も、フォーラムも、もう何回もずっとやってきて、百人委員会で、地域未来百人委員会を作りプランニングして、ドイツのやり方も導入してっていうかたちでいってきているわけじゃないですか。低調になったとは言わないけど、どっか市民のなかに、その参加に対して疲れがあるということと、参加制度が持っている限界も見えてきたっていう感じもする。今、景観にとっても、市民の意見を聞くとかが重要。その通りだし、実際、いろんな皆さんの参加の取組で維持されているところっていうのは、各地域にたくさんありますし、地域景観協議会の活動も活発に行われているわけだけど、その次のステージも見たうえで、次の20年、30年の間の京都市の市民参加協働地域、市民と地域住民と、それぞれどう関わっていくかっていう議論を、来年度は始めましょうねという気運が高まっているんですね。この時に、インクルーシブの問題っていうのは、非常に重要であって、京都っていうのが狭義の京都市民だけのものではなくなってきたわけですよ。観光業はもちろんそうだし、労働力ももちろんそうだし、それから、京都大学を中心とする留学生の数っていうのもある意味重要なわけですし、いろんなそういう方向にいくんだとするならば、留学生、外国人や京都大学、立命、同志社もそうですが、勉強して、日本の経済を支えるような、日本の文化を支えるような人材に変換していくっていう特典においては、多分、東京以上に先進的かもしれないっていう可能性も持っているわけで。そういうところで市民社会が広く変わっていくわけですよ。その時の参加のあり方はどうあるかっていうのが、「地域の活力の維持・向上を図るための地域まちづくり制</p>
-------------	---

	<p>度検討会議」だと思っんです。それを、もちろん成果も受け入れるわけけど、1つ、今回のパブコメをめぐって気づいたことは、2007年の新景観政策以降、この景観問題に関しては、京都市民が市役所を信頼したと思っんですよ。意見言わなくても、市役所に任せておければ、隣のマンションにいちいち意見を言いに行かなくたって、市役所がそこはちゃんとコントロールしてくれると。隣のデザインに口出しに行かなくたって、美観風致審議会がちゃんとやってくれるし、かなり新しい提案を建築家も持ってきたとしても、景観アドバイザー制度を活用して上手に処理してくれてきたわけですよ。個別では大変ご苦労があったと思っけど。ここにきて「ちょっと大丈夫？」っていう気持ちを市民が持ったことも確かだと思っんですよ。この「新景観政策の更なる進化検討委員会」に関してね。だから、冒頭言ったように、「これは大丈夫なんだよ」って返そうよっていうのが、今回の返し方の非常に重要なポイントだと思っんですが。</p>
<p>門内委員長</p>	<p>「大丈夫なんだよ」っていう回答じゃなくて、言っている人たちも一緒に頑張らないとできないわけですよ、そんなの。言っているだけじゃなくって、頑張ってもらわないといけないわけですよ。</p>
<p>宗田委員</p>	<p>もちろん頑張ってもらわないといけないわけだけでも、ただ、ちょっとみんな疲れているところもあったので。</p>
<p>門内委員長</p>	<p>それと、やはり京都の場合には、この間の10周年の記念事業のなかにもあったように、どっちかっていうと、自治連とか、いわゆるコミュニティの自治組織ベースのまちづくりになっているけど、大阪なんかの場合には、むしろそれよりは、アソシエーション型の、目的志向型でやっているじゃないですか。だから、そういう意味では関係人口とかいろんな人を巻き込んでいくには、必ずしも自治会だけのベースのまちづくりでは十分に対応でききれない部分がありますよね。</p>
<p>宗田委員</p>	<p>かといって、大阪や東京のように変わることも市民は望んでいないわけで。京都らしい進化の仕方っていうのに関する、議論が煮詰まってきたらと思っう。だから、私が今、言いたいのは、そういう過渡期にあるので、そこは行政も市民も我々専門家も、慎重にその取組を守っていくっていうことが必要だし、同時にコミュニケーションをどう取るかというか、我々もどういう意見表明するかっていうことに関して、大事であって。せつかくここまで醸成された市民の市役所に対する信頼っていうものが、損なうようなことがあってほしくないし、かつてのような対立の構図があると、大変疲れるし、まちがガタガタになることもあるんで、ここはせつかく築き上げてきた市民との信頼っていうものを大事にするようなかたちで展開すべきかなって、そういうことなんでお願いします。</p>

門内委員長	<p>広い意味での対話型のまちづくりデザインというのは、やはりどうしても大きな柱になってると思うんですね。</p>
辻本委員	<p>今のお話で、参加疲れっていうのは確かにあるのかなと。人口構成ですよ。団塊世代が10年ぐらい前、多かったから、彼らがすごい景観とかで頑張った気がします。今、その方たちが一世代上になって、もう引退になられてきて、その次の世代がそれを担うかっていうと、ちょっと心もとない感じがして。団塊ジュニアのところまでつなげていけるような啓蒙っていうのを。</p>
門内委員長	<p>担い手の問題ですね。先ほどから出てる。多様な主体の話というかね。</p>
長坂委員	<p>守る時っていうのは目標が見えやすいのでエネルギーが出やすいと思うんですが、創る側になってくると目標の意見が違ってくることがはっきり見えてくるので、そういう意味では正にそういうところに立っているんだなっていうふうに思います。</p>
中嶋委員	<p>非常に守るものがはっきりしていた時代の景観政策、新景観、10年間というのは、かなりコンセンサスが得やすかったんですけども。今度はやはり何か仕掛けていかなきゃいけないというか、みんなで京都をどういうまちにするかっていう、そういう仕掛けるための景観政策であり、ビジョンなんだっていうことが、さらに対話のなかで共有していくプロセスみたいなものを、進化するなかで進化のステップとして書き込んでいくというか、そういう巻き込むような方法っていうのを、市民参加も含めてですけども。疲れているところはあるんですが、守るんじゃなくて、みんなで新しいものを考えていくっていうことを共有したい。</p>
門内委員長	<p>まちを作っていくのには、理念とか一種の呼びかけみたいなものが必要だっていうね。例えば仙台なんかは、シティセールス戦略っていうのを作って、その7つの柱の1つがスポーツ都市なんです。それでスポーツ都市を先に議会に通してたので、楽天が来る前に、もし来たら税金投入して球場を作れるという地盤が出来た。それを見て、楽天が行ったんですよ。だから、そういうのを先に都市ビジョンを出して、そういう政策を実現してきたら受け入れられるという体制を作ってたから、そこに集まっていくっていう。そういう意味では少し先取りをしながら、どういうまちにしていくなかっていうことを、やはり呼びかけ議論していることがすごく大事だよね。実際、まちづくりの時に、さっきのように問題が出てきてそれに対して、どうしよう、どうしよう、という話のまちづくりがすごく多いんですよ。それだけでは不足で、自分たちがこれからどうしていくのかっていう、そちらのビジョンを考えていくという、まちづくりが、僕の見るところほとんど行れていない。そういう力量を持ち合わせていない。だから、今の</p>

	<p>担い手たちには、地域景観づくり協議会も荷が重すぎる。だから、それを育てて行かなきゃいけない。そういう重要な局面に来ていると思うんですよ。やはりすごく担い手たちも、試されているという。そういう時代が、今、来てて。頑張らなかったところは、みんなほんとに海の底に沈んでいくんですよ。だから最近の景観法もそうだけど、何とかすることができるっていう、「できる」規定の連続なんです。「してはいけない」と書いてないんです。だから何もしなくても罰則こないんです。つまり、できるって手を上げて頑張ったところだけに施策がついていくという、そういう時代を迎えているんです。時代はまったく変わってしまった。だからそういう意味では、やはり市民含めて専門家もみんなが、頑張らないといけないっていう、そういう時代が今、来てるので、参加型の社会へのフェーズが変わってきて。ドイツなんかは、参加をパンティシファシオンという言い方しないんですよ、イニシアティブって言うんですよ。ビルガイニシアティブっていうね。だから参加というのは、参加させられてる概念。イニシアティブっていうのが正しい。市民っていうのはビルガーだから、ビルガイニシアティブって言い方を。そういう参加の時代が変わってきてる。そういうふうに思うんですよ。</p>
川崎委員	<p>都市工学から考えると、東西軸の幹線道路、御池通、四条通、今出川通とか、それぞれの特色が歴史である。それで今回、KRPとか、梅小路の周辺の開発だとか、ロームとかいろんなものができあがってきていて、それが、何もないところから何かをしようとする、ものすごく大変で実はちょっとした芽がある時に、それをつないでいけば、そこが新しい京都の東西軸っていうか、研究拠点であるとか、それから先ほどのデザインオフィスだとか、そういう知的産業であり、京都の歴史と産業とも結びつくような新しい開発。駅なんかも入るかもしれないけど。そういうものが、知的な軸として、新しい東西軸っていう基本軸が道路として生まれ変わっていくというか、そういうイメージを持てば、別にこれ高さだけの調節だけじゃなくって、セットバックやいろんなものも含めて、いい環境として、産業と文化との交流と合わせて、そういう拠点軸がしっかりと東西軸のフォローができればいいなというのが一つの思いです。</p>
門内委員長	<p>私もKRPのなかに京都大学デザインスクールを作った時に、自分の研究スペースを何年か持ってたもんだからね。でも、あの辺でもちょっと横に行くとスローがあって、その行くと市場があるから、少しちょっと面白い店があったりと。なかなか、ああいうだけで、きめ細かい場所もいろいろあるんですよ。</p> <p>いかがでしょうか。事務局のほうですと議論を聞いてて、何か、もうちょっとこういうことを議論してほしいとか何はありませんか。</p>
山本都市景	<p>今までパブリックコメントをまとめる機会がいろいろありましたけれども、ま</p>

観部長	とめ方について反省すべきところがたくさんあったんだということに、今、気がついたりするところまでして。もっと意見出していただいた市民に寄り添って答えていくということとか。言葉の足りないところは言葉を補って書いていかないといけないと感じるところがありましたので、しっかり対応させていただきたいなというふうに思います。ありがとうございます。
門内委員長	やはり、パブリックセンターと企業、プライベートセクターとコミュニティセクターというのは、やはり対等な立場に立って、新しいガバナンスを作っていけないといけないんで。何かどっかが主導してみんながやっていかないと、できない時代に入ってますね。
文山景観政策課長	ビジョンが大事ということは一貫して、委員の皆さんからご発言いただいてまして、確かに私たちもそのとおりでというふうに思っています。ただ、そのビジョンが先行しないと物事が進められないのかどうかということについて、委員の皆さんの御見解をいただきたいというふうに思います。
門内委員長	何かビジョンや絵があつてというのはあるけど、例えば新しいプロジェクトを起こすことによってビジョンを作っていくっていう側面だつてあると思います。だからあらかじめ何か、スタディックなビジョンを、ここに絵に描いてあつて、それを実現するっていう、そういうビジョンってもう古いと思う。だから例えば、美観形成地区のように、做すべき様式がないような場所だったら、新しい文脈を作っていかなきゃいけないわけですよ。その時に、新しいビジョンを提出するっていうことだつて、あり得るわけですよ。だからそういう意味でビジョンが初めにありきっていうかたちではない。そこはすごく大事。
長坂委員	モノをデザインしていったときに、最初から姿形が見えると1番楽なわけですね。私たち、設計をするという立場で例えで言うと、どうしたらいいかわかんない時っていうのは、「どうしたらいいんですか」って聞かれても、「まだ考えてます」って、言い方になるじゃないですか。考えてる段階で、あれはダメ、これはダメっていっぱい言われてしまうと、気分が萎えるわけです。だから今回やるべきことっていうのは、どうするかビジョンを示すっていうことではなくて、まずは、こういうことは一応だから規制はある程度やってきたということが書いてあるわけで、規制の次の時には、「これは規制しません」ということを示すっていうのも一つのビジョンの出し方だと思うんです。だから結末を全部示すのではなくて、「こういうことは許しますから」とか、「こういうことをやったらいいですから」っていう、プラスのほうですね。だから結末の最後はわからないわけだけでも、部分に関しては一応言ってるという意味でのビジョン。そういうことは、やれるんじゃないかなと思ってます。

門内委員長	<p>ただね、何かビジョンって言う時に、建築学会なんかで都市計画委員会の人たちが、やはり抽象的じゃなくて絵に描いたものがビジョンだっというような幻想を持っておられるんですよ。それは違うんですよ。だから例えばパリがエLEGANSだと言ったら、そういうものもビジョンなんですよ。だから必ずしも具体的な空間的な絵だけがビジョンではないっということだと思っんですよ。ビジョンの場合、それを深めていったほうがいいと思っんですよ。</p>
齒黒建築技術・景観担当局長	<p>ありがとうございます。今までの我々のパブコメの考え方も反省する点があったということ、あと、今までの京都市の市民に対する関わり方とかを発想を変えていかないと、この多様な社会情勢も含めてやらないと、一律的な投網をかけるという、まあそれはちょっと大げさですけども、そういったことを今のなかからちょっと脱却した感じで、行政のほうも変わらなあかん。また、そういったかたちで市民の方に不安感を煽らないように、京都のこれからのことを、しっかりと一緒に考えていくという、そういった観点が非常に大事かなというのが、率直な気持ちでございます。</p>
門内委員長	<p>日本のまちづくりの場合に、結構、行政の役割ってすごく大きいんですよ。行政がちょっと噛んでくれるだけで、全然、展開が変わるんでね、しっかり頑張ってくださいっという。</p>
大島委員	<p>「地域の活力の維持・向上を図るための地域まちづくり制度検討会議」で、先日、シンポジウムを開催したんですけども、そのシンポジウムの時に私が担当したテーマについては、パネリストとして金融機関、京都信用金庫の方がいらっしゃいました。行政と金融機関というのは、従来、皆さんが思っおられる役割というものがあると思っんですけども、その時にお話しされてた内容を、ちょっと私が翻訳させてもらっ言っ言葉というのが、京都信用金庫はベンチャー支援とかいろいろやっおられるんですが、要はお金を貸すだけじゃなくっって、若い人たちのそういうユニークな取組に対して、お金はそんなに貸さないけども、京都信用金庫が支援するっという信頼を融資するっというふうなことで、そういうまちづくりを支援するっというふうなことをされてました。だから金融機関もそういうかたちで、新しい支援の仕方っというのをされてるわけなので、多分、行政についても何か新しい支援の仕方っというものもあると思っますので、何かそういうのを同時進行で考えていくっということが多分、景観っというのはあるのかなあっというふうにも思っました。</p>
門内委員長	<p>ありがとうございます。そろそろ予定の時間がまいりました。市民意見に対する検討委員会の考え方については、今日の意見を踏まえて、事務局と私で調整は</p>

	<p>しますけれども委員の皆様にも御確認いただいて、フィードバックをお願いできればというふうに思います。また、答申につきましては、次回の会議において、事務局から答申案という形で提示をさせていただいて、議論するということになると思います。それとおそらく制度設計については、そんなに性急に一気にできるわけではないので、少し新しい体制を考えていただいて、丁寧な制度設計、新しい制度設計をぜひしていきたいというふうに思っております。全体を通じて、何か、他に御意見、御質問はございますでしょうか。ないようでしたら、本日の審議は終わりたいと思います。事務局に議事進行をお返しします。</p>
事務局	<p>委員長、議事の進行ありがとうございます。</p>
鈴木都市計画局長	<p>長時間ほんとに毎回ありがとうございます。我々も実は今回いろいろ叩きというか、いろんな議論を事務方でするなかで悩んだのは、先ほどやはり出させていただきました、ビジョンの話。正に、門内委員長から、スタディックじゃないんだというところで、非常に目が開かれたところがあるんですけど、そことの関係というのは非常に我々として悩みでございまして、今日、ちょっとそういうところのきっかけをいただいたのは非常にありがたかったなど。それから、やはりエリアの範囲ですね。中嶋委員から、どういう場所でのことがありましたですけど、その制度設計というのが、「地域の活力の維持・向上を図るための地域まちづくり制度検討会議」のなかで、どうとられるかっていうのは、部局横断的にいろいろ議論はしてました。そういう意味では、この新景観政策の更なる進化というのは、持続可能な都市構築プランと、地域の活力の維持・向上を図るための地域まちづくり制度と、3つ一緒に融合しながらということが理想と違って、思い描いてはきてるんですけど、何とかほんとに最後の最後、大事な段階にきてるかと思うので、ぜひ引き続きご指導いただければと思ってございます。</p> <p>一つだけちょっと、今、ここ1、2カ月いろんな報道も含めて取り上げられて、委員の皆様にも、あらぬご苦勞をおかけしてるとはいいかというところで恐縮なんですけど、冒頭の宗田委員の御発言は、とにかく真摯に受け止めると、1件1件きちっと、返せということだと思ってますので、山本都市景観部長から申し上げたとおり、そういうかたちで、まとめていきたいと思っております。懸念しますのは、「91分の58、概ね3分の2」がどうっていう、非常に短絡的な報道の捉え方をされると、多分、マルかバツかみたいな、そんな単純な短絡的な議論をしてきたわけでは今日はないと思うので、そこはちょっと委員の皆様のご総意として、そうではないんだというところは、今日最後、確認させていただければ大変ありがたいなと思っております。</p>
宗田委員	<p>もちろん投票してるわけではないということはよくわかってます。ただ意見を寄せられた146万分の157という数が多いか少ないかってことは言わないけど、こ</p>

<p>長坂委員</p>	<p>ういう意見が集まったってことは、やはりまず事実として受け止めるべきだなど思うんです。だから、それをどこに結論にするかは、我々の検討委員会で決めることでもないし、都市計画局としてのお立場があるというのはよくわかりますので、それに拘束されたくないっていうお気持ちを今、表明されたんだとは思いますが、それに関して我々はこれ以上のことを言う気はないということです。</p> <p>私はただその資料のなかで仕分けがしてあって、その表に記載されていた数字を読んだだけの話です。</p> <p>何かあるムーブメントがあった時に、それに左右されて、異議が多くなってしまうっていうことがあります。それから特定の意見を持った人を集めて、みんなでこれ意見を言おうよって言った人が集めれば、そこが強くなるから、単純に数だけが強い市民の意見で、これが強く出たということで、数で反映させるってことはいいですねということをおっしゃられたと思うんですけど、私もそういう意味で、そういうことは参考にはするけども、そういう今の可能性も含めて、ここで議論していけばいいだろうなというふうに思っています。</p>
<p>川崎委員</p>	<p>この数の中身っていうのは非常に多様でぶれてて、文章の中までどちらにいくかわからない。とりあえず事務局が仕分けされただけのことです。ですので、意味的にもきちっと厳密にやったわけではありません。統計的には私は意味はないと思っています。ただ、思いとか、こういう意見があったということの課題について、それを是正していくという構えは変わりませんので。</p>
<p>門内委員長</p>	<p>複数に絡みながら書いてるのを仕分けをしている形になってると思うので、そういう文脈抜きでやられてるので、その辺は全体を見て、その精神をくみ取って、それはどれだけの感受性を持ってこっちがちゃんとそれに対応するかということが大事。</p>
<p>宗田委員</p>	<p>具体的な説明が付されてなかったっていうことも申し上げたわけであって、個別の場所のことをわかったうえで反対してるわけではないっていうことを申し上げてるわけです。</p>
<p>鈴木都市計画局長</p>	<p>正直な懸念を申し上げますと、例えばいろんな報道の見出しで、マルが何割とかバツが何割っていう、非常に短絡的な報道のされ方につながるのはちょっと避けたいなあと思ひまして。</p>
<p>門内委員長</p>	<p>あまりその辺は気にすることはなくて、やはりきちんとした姿勢を示していけばいいことだと思う。</p>

事務局	<p data-bbox="395 197 1412 280">以上をもちまして本日は閉会とさせていただきます。本日は長時間にわたり、ご審議，誠にありがとうございました。</p> <p data-bbox="395 342 454 376">閉会</p> <p data-bbox="1369 443 1428 477">以上</p>
-----	---